修士論文要旨

日本の教育における中国系ニューカマーの子どもの問題
―首都圏に在住する中国系ニューカマーの子どもと保護者へインタビューを通して―

胡（こ）　麗萍（れいへい）

序章

序章では、問題の所在、先行研究の検討と分析の視点、課題設定と研究方法について述べた。近年、国際化の進展と共に、日本で暮らす外国人および外国につながる人々も増加、多様化している。特に、その存在感を増しつつあるのが「ニューカマー」と呼ばれる人々である。ニューカマーの増加に伴い、日本で就学するニューカマーの子どもの数も増えており、現在、問題視されている。しかし、多くの適応課題に直面するニューカマーの来日事情、文化移動の影響、異文化体験についての研究において、最大の外国人集団としての中国系ニューカマーについての研究はまだ少ないといえる。また、近年増えつつある、呼び寄せで来日する中国系ニューカマー生徒の実態については、ほとんど研究されていない。本研究は首都圏に住んでいる中国系ニューカマーの子どもと保護者を対象とするインタビュー調査を通して、彼らの言語問題、適応問題、進路意識またエスニック・アイデンティティ形成など、日本の教育における諸問題の現状を検討することを目的とする。さらに、今後のニューカマー教育の問題点、なかでも、母文化教育を検討したいと思う。本研究が目指しているものは、中国系ニューカマー児童生徒に対する「よりよい教育支援の方途」を探るということのみならず、マイノリティの立場からニューカマーの教育経験を吟味し、マイノリティ教育とマジョリティ教育の新たな関係を作り出すことにつながればと考えている。以上の目的を達成するために、以下の六つの課題を設定した。

「課題 1」本研究の鍵概念としたニューカマーを検討する。

「課題 2」先行研究などを通して、ニューカマーに対する制度面の対応および社会的支援を提示する。

「課題 3」学校教育をめぐる諸問題を分析する：日本の学校文化、学校の対応―適応教育、日本語教室(国際教室)、国際理解教育

「課題 4」1990 年代以降の中国系ニューカマーの状況を概観したうえで、中国系ニューカマーの子どもの教育問題を整理し、具体的な調査内容を決める。

「課題 5」首都圏に在住する中国系ニューカマーの子どもと保護者を対象としたインタビュー調査結果から、彼らの教育をめぐる問題点を明らかにする。

「課題 6」近年文部科学省の『外国人児童生徒受入れの手引』と先行研究において提起されてきたニューカマーの子どもの問題の新動向に照らして、中国系ニューカマーに対する学校教育の問題と課題を検討する。

第 1 章　日本のニューカマーの現状

第 1 章では、「課題 1」に応じて、志水・清水（2006）、園部（2008）、磯部・松浦（2008）、鷹田（2011）などを取り上げ、本研究の鍵概念としたニューカマーを検討した。本研究では、70～80 年代くらいの比較的新しい時期に日本にやってきた人々のことをニューカマーと呼んでいると定義した。その上で、ニューカマーの対語として使われているオールドカマーの概念、ニューカマーとオールドカマーの区別、および外国人登録者の現状について説明した。

第 2 章　日本のニューカマーに対する制度面の対応および社会的支援

第 2 章では、「課題 2」に応じて、日本政府による定住外国人支援策について論じた。日本政

府は、教育、雇用、住宅、帰国支援、国内外における情報提供を柱とする「定住外国人支援に関する当面の対策」をとりまとめたことを示したうえで、ニューカマーの子どもたちに対する支援政策について、文部科学省の対応をめぐって論じた。文部科学省のニューカマーの子どもたちへの対応の特徴を要約するならば、子どもたちの日本語能力の「不十分さ」を補うことに焦点化されている。ニューカマー子どもたちに対する教育支援は、大別すると、「日本語指導」と「適応指導」という二つに分けて捉えることができる。

第 3 章　学校教育をめぐる諸問題

「課題 3」に応じて、学校教育をめぐる諸問題－日本の学校文化、学校の対応―適応教育、日本語教室（国際教室）、国際理解教育を分析した。鷹田（2011）は、「こうしたニューカマーの急増は日本社会に様々な課題を投げかけることになったが、そのひとつが日本の学校への外国人児童生徒の受入れをめぐる問題である。というのも、ニューカマーの子どもたちは、その大半が日本語を全くか、あるいはほとんど話せない状態で来日してきたからだ。それはまさに日本が初めて経験する事態であった」と述べている。 本章では、ニューカマーの子どもの就学の現状と日本語指導が必要な児童生徒の受入れ状況も詳しく説明した。恒吉（1997）は、日本の学校文化の第 1 の特徴を「一斉集団主義」と名付けた。太田（2000）は、集団での行動や協調性の涵養を重視し、「違い」や「異なること」に対する許容度は極めて小さいのが日本の学校文化の特徴だと指摘している。その文化背景の中で、日本語教育と適応教育、国際理解教育は日本人と同様の行動をとれるようになる。日本の学校習慣になじむという意味での同化主義教育となっており、それはニューカマーの子どもたちの独自性を奪う「奪文化化教育」となってしまう、という問題を示した。

第 4 章　首都圏に在住する中国系ニューカマーの子どもの教育に関する実態調査の概要

第 4 章では、課題「4」に応じて、中国国内の社会格差と歪んだ教育理念を概観しながら、本調査の問題背景、調査目的、調査対象、調査方法、調査内容など、調査の概要を説明した。調査方法としては、半構造化インタビュー形式をとり、2013「外国人児童生徒受入れの手引き」（文部科学省）による五大課題をめぐって、調査対象者の言語面、生活面、意識面という 3 つの側面に注目して、彼らの属性や来日時期・経緯、在留資格の状況、家庭環境・経済、言語の学習経歴、言語の使用状況、言語の自己評価、継承意識と母語保持努力、学校での生活状況・友人関係、進路意識、将来設計など、大まかに質問事項を決めておき、インタビューを行った。

第 5 章　中国系ニューカマーの子どもの教育に関するインタビュー調査の分析と考察

第 5 章では、「課題 5」に応じて、中国系ニューカマーの子どもと保護者を対象としたインタビューの内容－実施時期・手続き、調査対象者の属性、調査結果の分析と考察を詳しく紹介した。首都圏在住の中国系ニューカマーの子どもを持つ家庭 16 組、17 人―子ども本人が 6 名、保護者 11 名をインタビューした。子どもの在日年数をもとに、調査対象者を 3 組に分類し、家族（子どもの来日の経緯、親の仕事・経済力、家庭内使用言語など）、学校生活（1）（日本語学習、授業、学力、塾など）、学校生活（2）（友人関係、いじめ、学校文化・部活動など）、親子関係（しつけ、学習指導、保護者と学校との交流など）、文化継承と将来設計、という 5 つの調査事項を分けて分析を行った。分析と考察の結果から、中国系ニューカマーの子どもの教育をめぐる問題点を明示した。

「家族」調査事項では、鷹田（2011）の研究によると、家族問題はニューカマーの子どもが抱える学習困難の諸要因の一つである。家族問題には、脆弱な経済基盤、不確かな滞在予定という点がある、ということです。中国系ニューカマーの子どもはそれとは違い、安定的な経済基盤・滞在予定を持っているのが分かった。来日経緯については、自発であれ呼び寄せであれ、中国系ニューカマーの子どもは来日ということ

に対して、抵抗する気持ちがあったケースもあったが、ほとんどは納得したという答えが多かった。その原因は主に 2 つ見られた。1 つは、日本の生活環境と教育環境が中国より発達していること。2 つ目は、中国の成績主義による学校生活のストレスと、日本の学校生活の多様性及び気楽さである。また、家庭内の使用言語がかなり気になり、中国系ニューカマーの子どもは家の中で中国語、または中国語と日本語が混じりながら話すと思った。全体から見ると、中国系ニューカマーの子どもには、中国語の支援が必要になってきていると思う。

「学校生活(1)」調査事項では、中国系ニューカマーの子どもたちは、自身の中国で受けた教育と比較して、日本の学校生活が気楽で、日本に来てよかったという人が多かった。とりわけ、来日後、学習を通して達成感を獲得したケースが目立つ。学習に対する有能感は日本の学校生活における自己肯定感を高めることと深く関わりあると言っても過言ではない。中国では日本よりも受験競争の激しいことが背景要因にあると考えられる。

「学校生活(2)」調査事項では、学校生活の全体として、日本の学校の授業やスタイルに甘いと感じ、学校の規則などには厳しいと感じている傾向が見られた。本調査の中で、日本の学校システムで高く評価されているものもあった。具体的には、見学や遠足などであり、いわゆる実践的な面が高く評価されていた。社会的スキルの獲得面で、日本の学校システムを高く評価している者もいた。

「親子関係」調査事項では、中国国内の家庭の子ども中心指導方法と違っていると考えられる。しかし、完全に中国の教育を受けた保護者は中国式の考え方も持っているーアルバイト、恋愛が大禁止されている。大学までは、学習を中心するべき、学習のためなら何でも支える、と考えるケースが多くみられた。ただし、中国国内の両親と違うのは、16 歳または大学生になったら、自立の能力を養成するためにバイトさせる傾向が見られた。親と学校との交流に関しては、全体から見ると、保護者と日本学校との交流に関して、日本語の問題がないが具体的なことがわからない、という状況が多かった。インタビューからわかるように、日本の教育制度・受験制度について、中国系ニューカマーの親はほとんど知らない。つまり、教育システムの違う異国で教育を受けることは，子どもだけでなく，親にとっても大きな試練なのである。

「文化継承と将来設計」調査事項では、　今回のインタビューでは、中国と日本の文化などについては、日本人のマナー、礼儀、信用重視など、中国人の人情味、素直さ、感情重視などが高く評価されている。中国の文化と日本の文化の両方を取り入れたいという考えが一番多い。日本文化との差異の中で、中国系ニューカマーの子どもの継承意識については、中国出身を認めてから、日本の文化を理解し、日本人と同化しないで、自分の特性を持ちながら日本の社会に馴染むという声が多い。将来設計については、「とりあえず、日本にいる」という答えが多い。将来どこで生活していくかということは、はっきり決めていないケースが多いが、中国に戻る人も少なくない。それは、現在中国社会がずいぶん発展しているという背景要因にあると思われる。

終章　まとめ

終章では、「課題 6」に応じて、近年文部科学省の『外国人児童生徒受入れの手引』と先行研究において提起されてきたニューカマーの子どもの問題の新動向に照らしながら、インタビュー調査結果を踏まえて、中国系ニューカマーの子どもをめぐる日本の教育の問題と今後の課題を検討した。これまで中国系ニューカマーに関する研究では、かれらの在日状況について、「学校活動に参加しない」、「日本生活に馴染めない」、「進学ができない」、「学校で中国同士のグループだけに偏ってしいる」などという、マイナスのイメージが多く見られる。しかし、本研究からは、中国系ニューカマーの子どもたちは学校のインベントを参加したり、家族と旅行して日本の文化を体験したり、母国の友達と連絡したりしながら、日本の学校生活を楽しんでいるという、プラスの印象が残った。その背景に、中国の社会が大きく変わりつつあるということが

あると思える。原因は主に 3 つあると思われる。1 つ目は、大体 10 年前からの中国の大学の受入れ枠拡大とともに、中国では受験戦争が激化し、就職難が深刻化したことである。2 つ目は、中国国内のインターネットの発達とスマートフォンの普及である。最後は、中国系ニューカマーは他のニューカマーと比べて、日本での生活の基盤が整っているということである。

本調査でのインタビュー対象者の背景は様々なであり、親と子ども本人を聞き取ったが、視点を分けていなかったために、十分に分析できていない点が多い、という問題がある。したがって、今後、親からの視点と子ども自身の視点を分けて検討していく必要がある。また、中華学校に通う子どもと普通の日本の学校に通う子ども、定時制高校の子どもと全日制高校の子どもなど、学校種によって抱える問題が異なるのか否かを考察するために、可能であれば中学生以上の子どもを対象としたインタビュー調査を数多く行うことも必要だと考えられる。

文献

阿久澤真理子　1998「マイノリティの子どもたちと教育」中川明編　『マイノリティの子どもたち』　明石書店

李光奎・崔吉城　2006『差別を生きる在日朝鮮人』　第一書房

太田晴雄　2000『ニューカマーの子どもと日本の学校』　国際書院

小泉潤二・志水宏吉　2007『実践研究の進め　人間科学のリアリティ』　有斐閣

京大ユニセフクラブ　1998『こころの国境線～ニューカマーと私』　研究発表

酒井　朗　1997「文化としての『指導／teaching』－教育研究におけるエスノグラフィーの可能性」平山満義編　『質的研究法による授業研究』　北大路書房

佐久間孝正　2011『在日コリアと在英アイリッシュ―オールドカマーと市民としての権利―』　東京大学出版会

志水宏吉・清水睦美　2006『ニューカマーと教育―学校文化とエスニシティをめぐって』　明石書店

志水宏吉・山本ベバリーアン・鍛治致・ハヤシザキカズヒコ　2013『「往還する人々」の教育戦略―グローバル社会を生きる家族と公教育の課題』明石書店

園部陽子　2008「ボーダレスワールドにおける不就学と教育問題―イギリスと日本のニューカマーに焦点を当てて―」『東京家政大学研究紀要』第 49 集（1），2009

鷹田佳典　2011「多文化社会と教育の社会的公正―ニューカマーの子どもが抱える学習困難」宮島喬・杉原名穂子・本田量久編『公正な社会とは―教育、ジェンダー、エスニシティの視点から』　人文書院　138－157

恒吉僚子　1997「教室の中の社会－日本の教室文化とニューカマーの子どもたち」佐藤学編　『教室という場所』国土社

恒吉僚子　1998「ニューカマーの子どもと日本の教育」佐伯胖・黒崎勲・佐藤学・田中孝彦・浜田寿美男・藤田英典編『国際化時代の教育』岩波書店　187－202

舘奈保子　2011「外国人専門支援員のニューカマー教育支援に関する―考察」『大阪大学教育学年報』第 18 号

中文導報　「2011 年の生活保護受給者の状況」2013 年 5 月 24 日

趙　衛国　2007「中国人高校生の異文化適応過程―文化的アイデンティティ形成の要因に注目して―」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第 47 巻

趙　衛国　2010『中国系ニューカマー高校生の異文化適応―文化的アイデンティティ形成との関連から―』　御茶の水書店

戸井田克己　2005『日本の内なる国際化―日系ニューカマーとわたしたち―』

古今書院
内　閣　府　2009「定住外国人支援に関する当面の対策について」『定住外国人施策』　共生社会政策
広崎純子　2007「進路多様校における中国系ニューカマー生徒の進路意識と進路選択―支援活動の取り組みを通じての変容過程」『教育社会学研究』第 80 集
法　務　省　2012「平成 24 年末現在における在留外国人数について（速報値）」法務省ホームページ
堀家由妃代　2010「わが国における多文化教育の現状と課題―現代日本の“教育マイノリティ”―」『佛教大学教育学部学会紀要』第 9 号
三田村徳美・山崎瑞紀　2010「異文化を背景に持つ親子が抱える問題に関するインターニュー調査」『東京都市大学　環境情報学部　情報メディアセンタージャーナル』2010.4 第 11 号
文部科学省　2012「日本語指導が必要な児童生徒の受入れ状況等に関する調査」文部科学省ホームページ
文部科学省　2013「外国人児童生徒受入れの手引き」　文部科学省初等中等教育局国際教育課
文部科学省　2013「外国人の子どもたち等に対する支援施策について」　文部科学省ホームページ
山本彰子・本間知巳　2005「中国帰国中学生の異文化適応に関する研究」『京都教育実践研究』第 5 号
李　原翔・佐野秀樹　2011「中国系ニューカマー生徒の来日事情および適応課題について―中国系ニューカマー生徒の実態調査から」『東京学芸大学紀要』　総合教育科学系，62(1)：265－272

（胡（こ）　麗萍（れいへい）・修士課程 2 年）